

Publisher's Review

パブリッシャーズ・レビュー

●東京大学出版会・白水社・みすず書房のPR紙●



みすず書房の本棚

【無料送付】

No. 18 2016 春

(表示価格は税別です)

113-0033 東京都文京区本郷 5-32-21 tel. 03-3814-0131 http://www.msz.co.jp

深すぎた溝を越えて

齊藤道雄『手話を生きる』を読む

鷲田清一

思考も記憶も感情も、言葉という繊維で紡がれ、編まれる。言葉のなかで、ひとの思いはある象(かたち)を得る。そのとき言葉はいつも特定の言語としてある。そのことにひとの人生のある段階ではじめて気がつく。じぶんがこれまで話してきたとは違う言語があることに。そしてじぶんが話しているのはその一つ、「母語」と呼ばれる言語であることに。

では、「母語」でしか語れない「私たち」は、別の言語をこころの繊維とする人たちは通じえないのだろうか。分りあえないのだろうか。日常のちよつとしたふるまいであれば、言葉がなくても通じることは多い。しかし揺れ動くこころのその壁にまで理解の触手を伸ばそうとすれば、翻訳という作業を間にはさまざるをえない。翻訳とは、異なる言語

表現をじぶんの理解できる言葉に移し換えることである。物の世界、ひとが創った制度についてなら、それなりの翻訳は可能だろう。が、ひとの思いの綾、あるいは肌理となると、母語ですらうまく掴めないほどに微妙なところがあつて、ましてや異語によって表現されたそれは正確な翻訳が困難。そのとき、そもそも、何をもちって正しく移し換えていると言えるのかの根拠があやしくなる。翻訳の言葉はあくまで「私たち」の言葉だからである。「私たち」のなす翻訳が、ほんとうに他者たちの思いの正確な写しであるのかを判断する術を持っていないからだ。他者の思いの綾や肌理として想定されるものも、結局は「私たち」の言葉で想像可能なそれにはすぎない。他なるものを理解する

とは、それを「わがものとする」ということ、いつてみれば「横領」(appropriation)である。「知る」という語が「知る」であるとともに「領る」でもあるように。この限界をひととついに超えられない。

しかし、あらためて考えてみれば、「私たち」の母語ですら、なにか確定したものとは言いがたい。「かなし」という語の意味一つ取っても、歴史のなかで意味をどんどんずらされてきた。そしてこのずれがそれとの関係でずれていくところのものをピユアな状態で取り出すことはできない。言葉が写しているものごと、そのものも言葉で表わすほかないからだ。それもまた、その生成のなかにある。だから、言語には「本来の意味」などというものはありえないのだろう。詩作や翻訳においてちよつと歪

な言葉の使い方をするなかでも、母語という繊維は変容してゆく。母語は親しいものではあるが、母語だから正確であるとは言えない理由がここにある。母語が歪な用法を強いられることで翻訳が母語以上に何ごとかを言い当てる可能性もまた、あくまで翻訳の過程で生まれるのである。

刊行されたばかりの齊藤道雄さんの『手話を生きる』を読んだ。齊藤さんは、かつてTVディレクターとして手話の世界を取材するなかで、「ろう文化」の世界が異国にはなく「私たち」のすぐそばにあり、しかもそれが「私たち」にはきわめて見えにくい、ということをはきわめて根の深い抑圧の構造をともなうものでありつづけてきたことを知った。そしていまは手話によるろう教育の現場を担う立場にいる。

「日本手話」はろう者の自然言語であること。そして、聴者がろう者とコミュニケーションするための手段として考案した「日本語対応手話」はその本質において日本語であり、「日本手話」という自然言語とは決定的に異なることを、迂闊にも私はこれまでよく理解していなかった。そのような迂闊を慮(ももんが)ってか、齊藤さん

はこう書き足してくれている。日本手話を母語とするろう者が日本語対応手話の話者と話すときに、ろう者は、私たち日本語を母語とする者が「日本語が不確かな外国人と会話している」ときと同じことを感じていると。

「ろう文化宣言」(市田泰弘)によれば、「ろう者とは、日本手話という、日本語とは異なる言語を話す、言語的少数者である」。手話は独自の複雑な言語構造をもち、その言語コミュニケーションは独自の文化をもつ。言語能力は幼児期における教育に決定的な影響を受けるが、そのろう教育が聴者のほうから構築されてきたこと、いわばその「植民地化」の歴史を、それによってろう者のコミュニケーションが分裂せざるをえなかった理由をも含めて、齊藤さんはこの本で仔細に報告する。それらを、それぞれ内臓を抉(はら)くような重い論述がつかいでゆく。そして「ろう文化」救出のための関係者の長い足どりを考察したうえで、それを一筋の確かな光へとつないでゆく。

それは、ろう者と非ろう者が出会いなおす道であり、それぞれに本質的限界をもった手話と音声語とが持続的に接触しあうなかでそれぞれの可能性を更新してゆく道だ。その道を遠望する齊藤さんの眼はしかし、とても慎重である。たとえば、手話が視覚情報で編まれているがゆえに音声語よりも豊かな描写力を備えているのに対し、音声語は単調で抽象的であるがゆえに逆に時空を越えた意味の広がりをもちうる。そのように対比してみると、「映像はイメージを広げるようであり、逆に私たちの想像力を縛りつけているのかもしれない」というふうになる。これは、音声語を母語としそこから別の音声語を外国語として習得するのは違つて、手話を母語としそこから第二言語を習得するときの「格段の困難」を知る人だからその言葉である。が、この困難な道こそ、私たちが先に述べた、翻訳が母語以上に何ごとかを言い当てる可能性にもつながるものであろう。

「病気や事故で、それまで耳の聞こえていた人が聞こえなくなってしまうことがあります。そういう人は、途中から聞こえなくなった人、つていう意味で中途失聴者つていうの」

「じゃあ、ろうが聴になることもあるの？ 病気やなんかで、ろうが聞こえるようになるつて何が？」

「それはないんじゃない？ 耳の聞こえない人が病気になるつて聞こえるようになったなんて話、先生は聞いたことがないなあ。ないと思うよ」

そうかあ。よかつた……じゃ、ある日突然、あたしが聴になるなんてことはないんだよね。安心した。聴になつたらどうしようつて、ちよつとドキツとした。

あたしはろうのままでもいられる。あたしは顔をみあわせ、うなずきあつた。みんな聴になるつてことないんだ。

日本という国の「少数言語」

日本手話。日本語とは異なるその言葉を母語として自由にあやつり、異なる文化を生きて、圧倒的少数派の話し手。それがろう者。ろう児と呼ばれる人びとだ。

日本手話で授業を行い、手話と日本語のバイリンガル/バイカルチュラル教育を実践する日本初にして唯一の学校、明晴学園の校長を創立から五年間つとめた著者は、テレビの記者・ディレクターとして手話とろうの世界に足を踏み入れた。

以来20年にわたつて、言語学という科学に照らして手話という言葉のもつ力と豊かさを確かめる作業を重ね、ろう者の立っている場所、聴者の立っている場所、そのどちらとも違う場所から、手話をめぐるさまさまを見つめてきた。ろう教育の歴史、手話という言語が乗り越えてきた

ろうでいい、ろうがいい

齊藤道雄

《手話を生きる 少数言語が多数派日本語と出会うところで》



そして今も向き合っている困難、欧米の事例や研究成果。日本手話と人工内耳をめぐる状況……

地球のあらゆる場所で生き延びてきた少数言語とおなじく、多くの話し手ももちがいないが、豊かな表現と歴史をもつ手話の今、そして未来。聞こえないこと。それは、必死に受容し、絶え間ない努力によって乗り越え、克服すべき障害ではない。ろうでいい、ろうがいい——

「手話・言語学・ノンフィクション」(四六判・272頁・二六〇〇円)

(わしだ・きよかず 哲学者)

滞日十年、自身も義太夫を稽古したフランスの批評家による、体験的に哲学的文楽論がここに出現した。

「ある種の情熱にとりつかれて私は、年に十二回国立劇場に足を運び、人形の身体の錯乱と解体がどこまでいくのか見届けることにした。(…)このような断片化は、俳優の崩壊の比喩、登場人物の分散であり、そこで問題になっていくのは、俳優がいかにして舞台空間を占めるかということではなく、舞台空間によって気も狂わんばかりとなり、拠点を移さざるを得ない、そんなあり方なのだ。文楽を西

論劇比較にみちたエスプリ

フランソワ・ビゼ
《文楽の日本 人形の身体と叫び》
秋山伸子訳

洋の舞台から隔てるもの(そればかりか、ある意味では能や歌舞伎とも隔てるもの)、それは、文楽の舞台が「遊びの場」であるというその本質においてのことなのだ。」

身体的切斷、聴覚の優位、血みどろの人形……。パタユ、ジュネ、ギユタなどを援用しつつ、バルト『記号の国』にたづなうたいく批評には新鮮な魅力がある。加藤周一、木村敏、中川久定らの著作に学びながら、創見とエスプリにみちた身体芸術論であり、日欧比較文化論である。



『比較文化・古典芸能』(四六判・272頁・四二〇〇円)

歩いたあとを辿るように

池内紀《亡き人へのレクイエム》



『ロラン・バルト 喪の日記』
石川美子訳(三六〇〇円)

年経るにつれ誰しも、現世よりも彼岸のほうに知り合

いが増えてくる。亡き人はただ姿が見えなくなっただけで、友だちはいつまでも友だちだ。



著者近影

じかに親しかった人、何度か会っただけに忘れがたい人、本を通して会った人、出合いの形はそれぞれ、でもずっと大切に思っている人について、生きた時代に思いを馳せながら、その人の歩いたあとを辿るように書く。

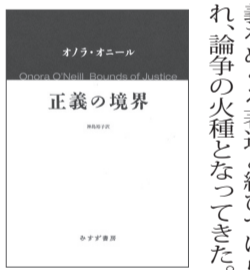
「戦争が終わったとき十二歳だった。大人も子供も飢餓のなかにおぼろげにうめられた。強者、すばしこい者、知恵のある者が食べ物にありつく。むろん、子供よりも大人のほうが強い。同世代で、弱く、やさしく、不器用で、へまなのが淘汰されていく。

「ヘーゲル、ラカン、マルクス」。S・ジエック 《もつとも崇高なヒステリー者》 ラカンと読むヘーゲル》
鈴木・古橋 菅原訳

政治的事件への鋭く挑発的な発言で知られる哲学者・ジエック。哲学、精神分析、政治、経済、文化など領域を超えた活躍ぶりと、多数の著作を誇るジエックの原点が本書だ。

「比較文化・古典芸能」(四六判・272頁・四二〇〇円)

《正義》から排除されるのは誰か
オノラ・オニール 《正義の境界》
神島裕子訳



『現代思想』(三月十八日刊)【A5判・368頁・六四〇〇円】

「私は本書で、国境はもはや正当な正義の境界として見なせない」と論じる。それ自体が制度である国境の正義は、疑われるべきものである。二〇世紀の最後の三〇年のあいだ、ジョン・ロールズの『正義論』をその先陣として、正義をめぐる著述がもたらした、ロールズのなしかつてないほど盛んになった。人権および戦争の正義、アパルトヘイトと共産主義の終焉、そして第三世界の開発と福祉国家。これらの議論が次々に正義をめぐる著述と結びつけられ、論争の火種となってきた。

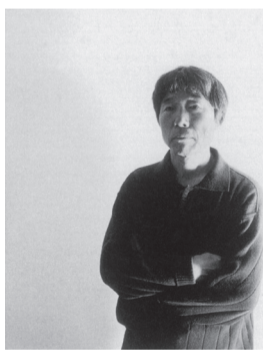
本書はそれらの論争を経て、正義の境界をめぐるとして、正義をめぐる著述がもたらした、ロールズのなしかつてないほど盛んになった。人権および戦争の正義、アパルトヘイトと共産主義の終焉、そして第三世界の開発と福祉国家。これらの議論が次々に正義をめぐる著述と結びつけられ、論争の火種となってきた。

初めての本格的な作品・作家論

ジルケ・フォン・ベルスヴォルト＝ヴァルラーベ

《李禹煥 他との出会い——作品にみる対峙、共存の構造》

水沢 勉訳



李禹煥(撮影 A. Schirano)

白いキャンパスにおおさらされた点、線をなし、うすく軌跡をのこしながら消えてゆく。一つの筆触、一筆のストロークは、つねに新たに、うつろいゆく生成と消滅、明と滅を描き、一度見たら忘れることのない密度を作品にあたえる。

国際的に高い評価をうける李禹煥 Lee Ufan だが、その作品の意義について、ことに西欧ではこれまで十分に論じられてこなかった。その芸術を、ドイツ・ポツダムに画廊を構え、李の作品と長年向き合ってきた著者が他の現代作家との比較を用いつつ理論的に分析。「アジア」は生得的に李のバックグラウンドをなすものだが、作品の分析においてこそさらさらそれを強調するのではなく、しかし西欧には生まれえないその芸術——充盈と

「もの派」の理論的支柱、李禹煥による幻の評論集の新刊。自ら決定版とみなす全面改訂版からの復刻。【美術評論】(A5判200頁・予四〇〇〇円)

みすず書房新刊

(2015・11・2016・3)
東京文京本郷5-1-3
三三三三(〇三)
(価格は税別です)

世界文学論集

移ろう中東、変わる日本
2012
2015

哲学への権利

セザンヌ
セザンヌ

集合住宅30講

パクリ経済
刑罰と戦争

片手の郵便配達人

不合理的な哲学
片手の郵便配達人

建築家の読書塾

ルシアン・フロイドとの朝食
難波和彦編

集合住宅物語

一般言語学の問題

セザンヌ論

片手の郵便配達人

建築家の読書塾

ルシアン・フロイドとの朝食

集合住宅物語

一般言語学の問題

セザンヌ論

片手の郵便配達人

建築家の読書塾

ルシアン・フロイドとの朝食

書評コラム

月刊『みずず』1・2月合併号では毎年「読書アンケート」特集を組み、ご好評をいただいています。本年、145名の方にご回答いただいた中から、小社刊行書への評をいくつかご紹介し、(敬称略、順不同)『長田弘全詩集』 透明で硬質なことを探して47篇の詩を書いた詩人の人生の軌跡(富士川義之) 長田弘『最後の詩集』 抒情の批判から出発した詩人の最後の本(蔭山宏) 二つの詩集を

読む、その刊行の在り方をすると、「詩と死」に向き合う見事な覚悟が感じられる(平尾隆弘)▽ヒール『ファルマゲドン』 田島・中里 製薬会社と精神医学会による病気の

者の凝視力に感嘆するばかり(宮下志朗) まさに「言語を愛し恐れつづけた批評」という語が、本書にも当てはまる(岡田温司)▽アガンベン『いと高き貧しき』 上村・太田 改めて触発された(市村弘正) 時折の

関心の赴くまま読み始めるが、どこから入っても面白い(前田耕作)▽クツエー『世界文学論集』 田尻芳樹 直球勝負の硬派な論(阿部公彦) 検閲は外から来るのではない、自己の内

部で起るのだ。そこから自由な人間などない。このひと小説だけじゃなかった(鈴木了二)▽アーレント『活動的生』 森一郎 思索の振幅が倍音となって伝わってくる(野家啓一)▽レズニック『21世紀に読む「種の起原」』 垂水雄二

「らい患者であろうが、世界の隅にありあろうが、何の隔りもありません。私は自由そのものなんです」(あながき)より 中国山地の山あいの農村に生まれ、家族の深い愛情に包まれて暮らしていた著者。幼少期にハンセン病を発症し、一九三八(昭和十三年)、十

歳のときに国立療養所長島愛生園に入園。以来、この場所を自らの天地として七十八年を生きてきた。重い後遺症を持ちながら、園内でめぐりあった夫と日常

のささやかな喜びを共にしてきた。それは、長島の海や山の恵み野に咲く草花であり、島で生きた療友、医療者・職員との支え合いであった。歴史の表舞台に決して出てくることがない人々の姿を鮮やかに伝える数々の文章から、深い感謝と追悼の念がひしひしと伝わってくる。瀬戸内の小島から心をいつ

も広い世界を羽ばたかせ、八十歳を越えた頃から文章を書き始めた。いま来寿を迎えた人が刻む、きらめく人生の足跡。瑞々しい感性が各紙誌で絶賛された『長い道』に続く第二作品集『文学エッセイ』(四六判・240頁・二四〇〇円)

『長い道』(二四〇〇円) 宮崎かづゑ 『私は一本の木』(二四〇〇円) 宮崎かづゑ



モダンガールの服装をした妓生(キーセン)

一九二〇—三〇年代、日本の植民地下の京城(ソウルの旧名)。恐怖と快楽が背中合わせの都市空間で、女性たちはどう生きたか。資本主義が根を下ろした都会・京城の街路を闊歩するモダンガールは、女学生・カフェの女給・女工・妓生(キーセン)・シヨップガールたちだった。イメージと商品消費し、労働力として消費されつつ、たくましく生きた彼女たちの一部は、日本各地のカフェや朝鮮料理店で働き、慰安婦にもされた。彼女たちの夢や欲望、生活、転落を追って、見えていなかった近代史を描く韓国歴史学のニューウェイズ。

植民地と近代化の隙間に

《京城のモダンガール 消費・労働・女性からみた植民地近代》

ソ・ジョン 姜信子・高橋梓訳

当時、日本で不足している米を確保しようとした増産計画が朝鮮で実施され、食糧が土壌を去り、都会へと職を求めて流れ出、また海を渡って日本にたどりついた。なかでも済州島と大阪を結ぶ「君が代」丸に乗って、たぐさんの未婚女性が渡日し、岸和田紡績工場などの女工となった。植民地朝鮮における政治的・文化的・経済的な境界性と地域性が極大化した済州島では資本と地域経済が直接に結びつき、女性を近代へと、日本へと押し出したのだ。日朝の資料やインタビューから、植民地と近代化の隙間に埋もれた女性たちの声が届く。著者は梨花女子大韓国女性研究院研究教授などをへて、現在カナダのプリティッシュ・ユ・コロンビア大学アジア学部(文化史)に留学中。

一九六〇年代半ば、東芝重役だった父が設立した小さな画廊を任せられた、ベイリイ、こと加賀澄江は、持ち前の朗らかな性格と欧米仕込みのセンスで、周囲から一目置かれる存在に成長してゆく。旧態依然とした画廊と距離をおき、自分が見込んだ作家にはチャンスを与える「みゆき画廊」は、若手作家の登竜門として独自のスタンスを築いていった。八〇年代に採用された著者



ベイリイさん(加賀澄江)と著者(一九八八年頃)

「二〇一五年読書アンケート」『みずず』最近号より 銀座をみつめた50年 美術界の習わしや作家や顧客とのコミュニケーション、ファッションセンスなどを澄江に教わりながら、画廊スタッフとしての品格を身につけていく。親子のような女性二人による画廊運営は、パブルや美術ブームを経て順調に見えたが、澄江の体は病魔に侵され。二〇一六年の五〇周年と同じ時に閉館を決意した現オナーの著者が、澄江の生涯をたどりながらその凛とした生き方を再発見する。画廊という仕事、個性的な作家群像、銀座や美術界のうづろいさをさわやかに描く記念誌。解説・芥川喜好(読売新聞編集委員) 『美術』(三月十八日刊) (A5判・240頁・三四〇〇円)

「二〇一五年読書アンケート」『みずず』最近号より 加藤幹郎/坪内祐三/増成隆士/郷原佳以/伊佐真一/千田善/福嶋聡/小西正捷/立岩真也/大井玄/最相葉月ほか(二・三月合併号) 『新連載』岡真理「ガザに地下鉄が走る日」(三月号) (各三〇〇円) 『みずず』定期購読のご案内 本誌は原則として郵送による年間購読をお願いしています。年11回発行、年間購読料三七八〇円(税送料込)です。『読書アンケート』特集掲載の一・二月合併号のみをご希望の方は、切手四一〇円分(送料込)を直接、みずず書房営業部「みずず」係までお送り下さい。(〒113-0033 文京区本郷5-32-21) 折り返しご発送いたします。バックナンバーは在庫をお問い合わせの上、お求め下さい。誌代(税込) + 送料手数料にてお届けいたします。

憲一/松野孝一郎/西平直/加藤幹郎/坪内祐三/増成隆士/郷原佳以/伊佐真一/千田善/福嶋聡/小西正捷/立岩真也/大井玄/最相葉月ほか(二・三月合併号) 『新連載』岡真理「ガザに地下鉄が走る日」(三月号) (各三〇〇円) 『みずず』定期購読のご案内 本誌は原則として郵送による年間購読をお願いしています。年11回発行、年間購読料三七八〇円(税送料込)です。『読書アンケート』特集掲載の一・二月合併号のみをご希望の方は、切手四一〇円分(送料込)を直接、みずず書房営業部「みずず」係までお送り下さい。(〒113-0033 文京区本郷5-32-21) 折り返しご発送いたします。バックナンバーは在庫をお問い合わせの上、お求め下さい。誌代(税込) + 送料手数料にてお届けいたします。

国家は市場と結託して、経済危機を先送りした 資本主義は危機の先送りの過程で、民主主義を解体していった

ヴォルフガング・シュトレーク 鈴木直訳 『時間かせぎの資本主義』 いつまで危機を先送りできるか

積みあがった債務のピラミッドは崩壊するのか、資本主義の危機を民主主義的にコントロールすることは、いま可能だろうか。70年代からEU危機まで、民主主義的資本主義の解体過程をたどり、ヨーロッパとアメリカで大きな反響を呼び起こした現代資本主義論。4200円

◆「手話を生きる」の著者、斎藤道雄の本 悩む力 べてるの家のひと

「そのままでいい」。北海道・浦河の町に根づいた心病む人の共同体を温かく描く。第24回 講談社ノンフィクション賞受賞。2000円

治りませんように べてるの家 的いま

悩みを、生きづらさを、苦勞を語ることはを取り戻していくこと。数かぎりない問いと答の中から生まれたドキュメント。2000円

◆他者と出会う、他者のことを理解することは ピダハン 「言語本能」を超える

エヴェレット アマゾン奥地に暮らす少数民族の言語と認知世界が、西歐的な普遍幻想を根底から揺るがす。屋代通子訳 3400円

◆手話を生きるの著者、斎藤道雄の本 悩む力 べてるの家のひと

「そのままでいい」。北海道・浦河の町に根づいた心病む人の共同体を温かく描く。第24回 講談社ノンフィクション賞受賞。2000円

治りませんように べてるの家 的いま

悩みを、生きづらさを、苦勞を語ることはを取り戻していくこと。数かぎりない問いと答の中から生まれたドキュメント。2000円

◆他者と出会う、他者のことを理解することは ピダハン 「言語本能」を超える

エヴェレット アマゾン奥地に暮らす少数民族の言語と認知世界が、西歐的な普遍幻想を根底から揺るがす。屋代通子訳 3400円

◆手話を生きるの著者、斎藤道雄の本 悩む力 べてるの家のひと

「そのままでいい」。北海道・浦河の町に根づいた心病む人の共同体を温かく描く。第24回 講談社ノンフィクション賞受賞。2000円

治りませんように べてるの家 的いま

悩みを、生きづらさを、苦勞を語ることはを取り戻していくこと。数かぎりない問いと答の中から生まれたドキュメント。2000円

◆他者と出会う、他者のことを理解することは ピダハン 「言語本能」を超える

エヴェレット アマゾン奥地に暮らす少数民族の言語と認知世界が、西歐的な普遍幻想を根底から揺るがす。屋代通子訳 3400円

◆手話を生きるの著者、斎藤道雄の本 悩む力 べてるの家のひと

「そのままでいい」。北海道・浦河の町に根づいた心病む人の共同体を温かく描く。第24回 講談社ノンフィクション賞受賞。2000円

治りませんように べてるの家 的いま

悩みを、生きづらさを、苦勞を語ることはを取り戻していくこと。数かぎりない問いと答の中から生まれたドキュメント。2000円

◆他者と出会う、他者のことを理解することは ピダハン 「言語本能」を超える

エヴェレット アマゾン奥地に暮らす少数民族の言語と認知世界が、西歐的な普遍幻想を根底から揺るがす。屋代通子訳 3400円

◆手話を生きるの著者、斎藤道雄の本 悩む力 べてるの家のひと

「そのままでいい」。北海道・浦河の町に根づいた心病む人の共同体を温かく描く。第24回 講談社ノンフィクション賞受賞。2000円

治りませんように べてるの家 的いま

悩みを、生きづらさを、苦勞を語ることはを取り戻していくこと。数かぎりない問いと答の中から生まれたドキュメント。2000円

◆他者と出会う、他者のことを理解することは ピダハン 「言語本能」を超える

エヴェレット アマゾン奥地に暮らす少数民族の言語と認知世界が、西歐的な普遍幻想を根底から揺るがす。屋代通子訳 3400円

新装復刊 4月

精神疾患と心理学

フーコー 精神と身体、狂気と文化を考察した問題の書。神谷美恵子訳 ¥2800

災害の襲うとき

カタストロフィの精神医学
ラファエル 被災者の喪失感へのこころのケアの重要

電子書籍

4月配信開始予定
(タイトル変更となる場合がございます)

地に呪われたる者

ファンン 鈴木道彦・浦野衣子訳

暴力について

アーレント 山田正行訳

貧乏人の経済学

もういちど貧困問題を根っこから考える
バナジュー/デュフロ 山形浩生訳

ピダハン

「言語本能」を超える文化と世界観
エヴェレット 屋代通子訳

生きがいについて

神谷美恵子 柳田邦男解説

アジェのパリ

大島洋 百年後にアジェの目となりパリを撮る。写真家によるエッセイ。¥3500

映画女優 若尾文子

四方田犬彦・齊藤綾子編著 日本映画黄金期の名女優を多角的に論じる。¥3800

時の震え

李禹煥 日常の時間空間、過去の記憶…現代美術作家の自伝的エッセイ。¥4200

最終講義

分裂病私見
中井久夫 第一人者が語る感動作

悩む力

べてるの家の人びと
齊藤道雄 講談社ノンフィクション賞受賞

治りませんように

べてるの家のいま
齊藤道雄 <弱さを絆に> 感動のルポ

信じない人のための<宗教>講義

中村圭志 <脱信仰>の宗教案内

オシムの伝言

千田善 元日本代表通訳が記す923日間

みすず書房 近刊のお知らせ

4-6月の刊行予定から

奴隷船の歴史

M. レディカー 上野直子訳 笠井俊和解説
拝啓 市長さま、こんな図書館をつくりましょう
アントネッラ・アンニョリ 菅野有美訳

怪物君

吉増剛造
料理と帝国(仮)
レイチェル・ローダン ラッセル秀子訳

ジャコメッティ

彫刻と絵画
デイヴィッド・シルヴェスター 武田昭彦訳

歴史学者の工房

草光俊雄

科学の曲がり角

フィン・オーセラー 矢崎裕二訳

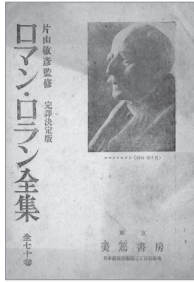
小さな建築

[増補新版] 富田玲子

(ウェブサイトにもご案内しています
<http://www.ms2.co.jp/book/new/>)

みすず書房・最近の重版より

- ツンドラ・サバイバル 服部文祥 ¥2400
- 夜と霧 [新版] V.E. フランク 池田香代子訳 ¥1500
- 片手の郵便配達人 G. パウゼヴァンダ 高田ゆみ子訳 ¥2600
- 動くものはすべて殺せ N. タース 布施由紀子訳 ¥3800
- 不健康は悪なのか——健康をモラル化する世界 メッセル/カークランド編 細澤仁他訳 ¥5000
- 落語の国の精神分析 藤山直樹 ¥2600
- 社会理論と社会構造 R.K. マートン 森東吾他訳 ¥8800
- バクリ経済——コピーはイノベーションを刺激する ラウスティアラ/スプリグマン 山形・森本 訳 ¥3600
- 皇帝の新しい心——コンピュータ・心・物理法則 R. ペンローズ 林一訳 ¥7400
- 色彩の表記



ロマン・ロラン全集 [第1次] 内容見本 (社名は「美籍書房」「みすず」とルビ付)

みすず書房の創業者、小尾俊人、一九二二—二〇一一。敗戦の年の秋、二二歳で学徒出陣から戻り、その暮れに、焼け跡の東京で新しい出版社を立ち上げた。それ以降七〇年になる。

著者の小尾との付き合いは長い。ひとつは、翻訳権を仲介する日本ユニ・エージェンシーの代表として、みすず書房の翻訳権取得や複数のトラブルに関わった。もうひとつは一九六八—一九九〇年、二〇年以上続いた雑誌「みすず」の連載、出版界の現状に切りこむ「朱筆」の執筆者として。筆名は出版太郎。毎月、まだ社員の出社しない早朝に来社し、朝の早い小尾と多くの話をした。

創業の頃を中心に

宮田昇

《小尾俊人の戦後 みすず書房出発の頃》



小尾俊人 (1993年)

著者の関心は「人脈」と刊行書の関係にある。同じ信州出身の岩波茂雄や古田晃(筑摩書房創業)には、同郷や同窓の人脈があったが、小尾に

は何もなかった。では一冊目の著者、片山敏彦とはいっ知り合ったのか。「ロマン・ロラン全集」「夜と霧」はどんなきっかけで生まれたのか。第一章は小尾のルーツを訪ねる諏訪紀行。第二章は会社立上げの準備から「夜と霧」まで。第三章は小尾と宮田の付き合いと思いつから、等身大の小尾を描く。

付録として、小尾が唯一遺した「一九五一年の日記」と雑誌「みすず」創刊以降三年余り執筆した「編集後記」を収める。【四月中旬刊】(四六判408頁・予三四〇〇円)

比類なき、怒濤の長篇

トーマス・ベルンハルト 池田信雄訳

《消去》「新装版」

二〇〇四年、文学シリーズ《Actes》から上下本として刊行され、圧倒的な評価と支持を受けながら、長らく品切れにしていた、オーストリアの作家トーマス・ベルンハルト(一九三一—一九九)の代表的長篇小説『消去』を、ここに一巻にして新たに刊行。

主人公フランツ・ヨーゼフ・ムラウが両親と兄の死を告げる電報を受け取るローマの章「電報」と、主人公が葬儀のために訪れる故郷ヴォルフスエックを描く章「遺書」を併せて4点を重版いたします。

『大山猫の物語』刊行と併せて4点を重版いたします

『大山猫の物語』刊行と併せて4点を重版いたします

レイヴンストロース
ライフワーク『神話論理』に連なる『小神話論理』三部作『やきもち焼きの土器づくり』『仮面の道』『大山猫の物語』。その最終冊の刊行(本紙二面下に広告)と併せて4点を重版いたします。

構造主義人類学のマニフェスト『構造人類学』荒川幾男他訳(六六〇〇円)。七七年初来日時の講演集『構造・神話・労働』大橋保夫編(二八〇〇円)。自身を語ることの少なかった碩学が年若い鋭敏な聞き手を得、貴重な証言にみちたエリボンとの共著『遠近の回想』増補新版。竹内信夫訳(四五〇〇円)。豊饒な神話の森のガイド『レイヴンストロース』『神話論理』の森へ(渡辺・木村編(三〇〇〇円))は、巻末の主要著作目録(泉克典作成)を改訂、祝100歳や追悼特集・没後出版により近年増えた書誌を加えて日本語で読めるレイヴンストロースをほぼ網羅。中沢新一、エナフ、内堀基光、鈴木一誌、港千尋、安富歩、池澤夏樹執筆。



服部文祥

みすず書房 営業部だより

昨年、弊社の創立70周年にあわせて、多くの書店に記念のフェアを開催していただきました。様々なアイデアを駆使した個性的な展示が多く、見栄えのする素敵なフェアを数多く拝見しました。ご協力いただいた書店とご担当者にこの場を借りまして感謝申し上げます。

そのフェアの一つに、ロングセラーをジャンルにこだわらず、刊行の年代ごとに並べて展示した店がありました。一九五〇年代から二〇一〇年代まで、年代順に眺めるとロングセラーの全貌が一目で分かるように感じました。

創業70周年記念フェアを、ひきつづき開催していただいている書店があります。弊社ウェブサイトでご確認いただき、足をお運びいただき、本をお手にとりただけましたらまことに幸いです。

服部文祥『ツンドラ・サバイバル』 梅棹忠夫賞を受賞

「第五回梅棹忠夫・山と探検文学賞」を『ツンドラ・サバイバル』が受賞しました。

「野生動物を狩って食料とする行為は、人は動物と同じ地平にあるという主張で、メッセジの明確性、探検の先駆性」

服部文祥編(大人の本棚) リゴニ・ステルン、ネルソン、稲見一良、星野道夫、ナセン、津本陽、ハンチントン、アルセーニエフ、坂本直行、辻まこと、宮沢賢治の厳選11作を所収。(二六〇〇円)

性に抜きんでた(選評より) ◆服部文祥 『サバイバル・シリーズ』 『サバイバル登山家』(〇六年) 『狩猟サバイバル』(〇九年) 『ツンドラ・サバイバル』(一五年) (各二四〇〇円) ◆そのほか服部文祥の本 『狩猟文学マスターストories』 服部文祥編(大人の本棚)